
よどみと流れ

森屋27

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
よどみと流れ

【Nコード】
N0229S

【作者名】
森屋 27

【あらすじ】
専門学校に通う奥村は、理想の自分と現実世界での自分の居場所のなさに、失望の淵に立っていた。そして、クラスメートの田辺の存在により奥村は入水自殺することを決めた。

夕方が近づいてきている。1月の雪を含んだような冷たい風が顔を掠めた。特に河川敷は風が冷えている、コンクリートが黒く変色している。川沿いには古びた家が連続的に並んでいる。

人がすんでいる気配がないが、たぶん住んでいるのだろう。辺りには人はいない。

今日は曇り空で雨が少し降ったので 夕日も淡い朱色で上空は薄水色だ 川に反射する光もどこか鈍い 路面電車がガタガタと走っている陸橋の下は音が突き抜けている、しかし、橋の下の川は光も音ものみこんでしまった黒が漂っていた。流れる白い泡が鮮明に見える 光はあるのだ。

ガタンゴトガタン キー耳障りな音が聞こえた 路面が信号に捕まったらしい。

まだ5時だ 日の入りは5時25分あと25分で今日はもう終わったのと同じだ。僕も今日でおしまい。けど、明日は来ない。僕が僕を終わらす。

バツハのアリアを聞きながら 僕は明日のことを考えていた、何を食べるかとか 何時に起きるとかそういうことじゃなく、明日僕がどう終わりにするかを、しかし どうにも決まりやしない場所が悪いのか部屋からでた。

一人暮らしをして2年がたった。実家はここから8時間バスに揺られたところにある。遠いい、しかし、その遠さが僕を軽くした。

元々 内向的で人付き合いも悪かった。そんな僕に友達は何処でもここでもできそうにもなかった。

毎日鬱々としていた。僕は集団の中で一人ということが、どうしようもなく苦痛でしかなかった。しかし、行かなくてはならないし、

友達を作る勇気もなかった。

ある日、鉛筆の箱を盛大に廊下でぶちまけた。カランカランと音を立てて。恥ずかしくて、恥ずかしくてどうしようもない緊張におそれ、鉛筆を急いで拾っていた。

廊下に誰かの靴を見た。見上げると、そこには同じクラスの田辺という奴がいた。田辺は少し間を置いてから、無言で拾ってくれた。クラスでも明るくい奴だと評判があった。

ひよいひよいと拾ってくれた彼に対して、僕はありがとうと本当に小さな声でいったが、彼には聞こえたらしくニヤリと笑って肩をぽんぽんと叩いて立ち去っていった。

これだけの出会いだったが、僕にはとても大切なことだった。あんな風に人と接してみたかった、初めてもった願望だった。しかし、その願望は叶わなかった。

川沿いを歩いていたら 大きな川で鳥も多い、鷺やらカモメやらが羽を休ませている。今日はよく晴れていたのでよく冷えている。

手が寒い、ポケットに手をつ込んだ、指にカサリと何かが触れただしてみると、透き通る黄緑色のマスカット味のキャンディだった。甘酸っぱく おいしいキャンディだった。包装をといて ポイツと口に含んだ酸っぱさが口の中で痺れた。それでも、僕はその感覚に耐えられず、口からそれを川に捨てた、甘さが取り残された口はなんだか淋しかった。

トポンと小さな音を立てて、川に沈んでいった。

その時 僕は思い描いた川に飛び込んだ飴がゆっくりと速度を保ちながら 川と同化するために溶け始める 糖度の高い水が熱気のように漂い同等の水へと落ちていく。そうして、飴はどこにもなく、川になった。僕はぼんやりと川を見つめていた。僕は決めた。

路面が動き出した。ごう がたん がたんと 遠ざかっていった。僕は川を見つめている。

マスカットキャンディと僕が溶けこんだ川だ。もうすぐ日が落ちる、僕は、太陽のように落ちていこう。

地球の反対側に行き人々が忙しく動いているのを僕はクスリと笑う。やはり 僕には太陽は似合わない。僕の先はほの暗い川だ。そうして 僕は飴となり 川におちた。

体に何かが染み込んでくる感触がする。僕は前のめりのままおちていく。目が痛い。

目を開けているのか つぶっているのかわからない 僕の中の感覚は消えていた。外界からの刺激しからなくなっていた。体が空洞になったようだ。

ぴちゅん ぴちゅん 体の中から聞こえてくる 空っぽになった体に川の水が染み込んでいるんだ ぴちゅん ぴちゅん 僕はそう思った。

溜まりにたまった水たちはそれでも 染み込む 染み込む膨張していく皮膚たちがこれでもかと 薄くなる 細い血管が網のように広がっている はたからみれば それは、 大きな毛糸の玉のようだ 細い長い血管が全身を取り巻いている 血管は自らの崩壊を知って 皮膚から抜け出していく 一本また一本と 水の中に糸がまっていく 中心は鈍い黄金に発光している もう人間ではなくなってしまったのだ これから行く世界のための転生の準備 僕はそう夢をみた。

しかし 僕は ただ沈んでいくばかりだ。

特別なことなんて何にもない 何にもないのだ。僕はそれに懐かしい絶望的な思いが溢れた これが僕なのだ これこそが僕なんだ。

どれだけ 泣いても 叫んでも 己を切り裂いても 僕から僕はではしないのだ。僕が僕に入った時点で後戻りはできなくなった

のだ。まるで マトリョーシカのように 開けても 開けても 僕がズラリと背を変えて並んでいる その顔は不満があり不幸を呼ぶような顔だった。

しかし、一番小さな僕は不気味な笑顔だった 残虐性のある 思わず目をそらしたくなるような 毒を含んだ顔だった。僕が僕の方をジロリと見た、その目はニタリと笑いこっ言ったー。僕は僕に襲いかかっていた。手が痛くても足が痺れても僕は手を止めることは出来なかった。

これは目に見える殺意だ燃えたぎるような 焦げる臭いが鼻につく。

僕は立っていた。

赤い赤い世界に立っていた 地面はグニヤリと曲がっていて 力を入れて立たないと 倒れてしまいそうだ。僕は立っていた。腕も手も足もなく 胴体だけで立っていたいびつな形、人間とはよべないだろう。

しかし、僕は思考することも喋ることも出来る、でも人間ではないらしい。出来損ないの彫刻のように、僕はそこに捨てられていた。

赤く少し生臭ささのする場所に、音がする。ぎい と下から響いた 僕は目を下に向けた なんと 胴体には赤い少し寂れたドアがありそこから 僕が出てきた 手にはジヨウ口を持っていた。

彼はジヨウ口を傾けて 花に水をやるかのように 丁寧にまいていた。しかし、その水は水ではなく 赤く少しドロリとした液体だった。彼がこの世界を赤くそめているらしい。

赤い水がなくなったら 急いで 僕の中に入り また 巻き始める。それを彼はずっとしていた。ふと彼が上を見上げた、ぐるりと見回しているうちに僕と目があった。

彼は目をギョロギョロさせながら口をパクパクさせて ピタリと止んだと思ったら ニヤリと笑って 僕の扉の方を指差した。僕が扉の方を見て見ると あの赤い水がダラダラと流れ出していた。

徐々に僕はそれと比例するように小さくなって崩れ落ちた。体はな

くなり僕が水たまりのように地面からみていると 僕が見下ろしていた。

何故か少し嬉しいそうに僕を見つめていた 手にはもうジヨウ口はない。それを見て、僕はズルリと地面に染み込んだ。彼は嬉しかったのだ。

僕が僕を解放できたのだと 嬉しかったのだ。

彼は今何をしているのか また新しく僕を溶かし始めているんだろうか。そう思うと、僕はたまらず 悲しい気分になった。内から何か出ていく感触があった 涙だった。

けれども 泣いても 泣いても川は悲しみも知らずに飲み込んでいく ただいるだけの存在 何も干渉しない だからこそ僕が選んだのに今は溜まらずそれが悲しかった。

無限に広がるこの気持ちの隅々に行き渡った。ふいに下降していく 僕の体が浮き上がったのだ。ほんの些細な拒絶が川の流れに乱れをつくったようだ。僕は焦った もう 戻りたくはない。

それよりも やっと見つけたここから排除されることが とてつもなく怖かった。僕はもがいた。それでも 浮かび続く 手を底に届くように力一杯 伸ばした。

手から離れていく風船のヒモをつかむように、浮くものを引き止める。反対に僕は完全なる落下を願い手を伸ばした。

手に暖かい感覚が伝わった。僕の手を誰かが掴んでいた。僕からゴポリと泡がでた。田辺くんだった。

彼は僕をみてあの時と同じようにニヤリと笑った 僕は動けなかった。何故彼がここにいるのか どうして僕を助けてくれるのか。

「妬ましかったんだろ、田辺が。」

ああ、そうだ、僕が僕に言ったんだ。僕の最後の引き金を引いたのは 君だったんだ。田辺くん。

だから君なんだね だから 僕を助けるんだね。僕を落とすことができるのは 君しかないんだ。僕はそう思った。

彼にあつたことで 僕自身のギリギリのバランスが崩れてしまったのだ。憧れの眼差しとともに湧く 腐敗臭の立ち込める嫉妬 そして 自分への否定だった。

僕は沈んだ。肩を誰かがポンポンとたたいていった。その振動が体全体に広がった、意識が定まらない、乱視のように世界がブレる。気分が悪い 頭がグラグラする。内から何かでてくる巨大な気配、僕が口を開けると待っていたかのように。

ゴロリと僕よりも大きな黄色の丸い形のものでてきた。体に力が入らず 僕は横たわって虚ろにそれを見た。

黄緑色の物体は僅かな光を発していた。何か動くものがちらりと見えた。僕はふらふらしながら、それに触れてみた。暖かい。

まるで母親の羊水の中にいるみたいな安心感、背中を丸くして中心から、ホースのようなものが端まで繋がっている。

トン トントン 優しい音が聞こえる、母親がお腹を撫でているんだ、愛おしく、その幸福な存在に。僕はこの中に入っているモノが堪らなく羨ましくなった。

その眼差しが欲しくて、その温もりが欲しくて。

僕はいつの間にか手にしていたカッターでそれを裂き始めた。つうと 刃を突き立て優しく垂直に下ろした。そこから 黄色の液体がぷつくりと漏れだした。

徐々に徐々に減って行く光景を僕は黙って 遠くのほうで座ってみていた。

トロリと最後の滴が落ちた。

ビチャ ビチャと辺り一面のひかる黄色い湖に波紋を作りながら放たれる甘く懐かしい匂いの中、僕は中心にある あの丸い幸福な場所を目指した。僕はゴクリと唾液を呑み込み中に入った。僕は震えた。そこには、ありとあらゆるすべての人間のしあわせという感情を最大限まで高めた純粹で光輝な世界だった。

「僕は手に入れたんだ、この世界を、これは僕だけの物だ これが

あれば僕はどんなことだって なんだって出来る。
もう 僕はいらぬ。これがありさえすれば 他のものなんていら
ない！」僕は張り裂けるくらい大きな声でさげんだ。

響き渡る声の中、ポツリ ポツリと静かな音が聞こえた。ホース
がダラリと垂れ下がり、亀裂の入った箇所からあの黄色い液体がポ
ツリ ポツリと滴り落ちていた。

その下に目をやると、さっきまで 安心と愛情に包まれていたモノ
が力なく背中を丸くして横たえていた。僕はいらぬものを排除す
るためホースを千切り、それに手を伸ばした。

その時、後ろから誰かの声がした。僕は後ろに振り向いた、これ
以上ここに誰もいれたくはないと思ったが、そこには誰もいなかった。

「いいのかい それで君は本当によかったのかい。そこに横たわる
モノを犠牲にしてまでも、君は何かを手に入れたのかい？」見
えないものに向かい、僕は声を荒げた。

「もちろんさ、僕はこの世界を手に入れたんだ、犠牲なんて そん
なこと知ったことじゃない！」僕の感情は一点を突き破つてい。

溢れだした感情はとめることができなかった。その声は静かに言った。
「そうか、それなら君は前を見てみな、君が侵した犠牲者を」。そ
こで声は途切れた。

「僕は間違ったことなんてしていない。これは今まで耐えてきた僕
へのご褒美なんだ。」間違つてなんかいない。僕はそう思い作業の
続きをするため、前を向いた。

そこには田辺くんが黄色い風呂に浸かっていた。

5時半の賛美歌がスピーカーから流れ出した 町全体に波紋状の
波が静かに押しよしているかのような 俺はふとその音と寒さによ
って目を覚ました しまったなこんな1月の川沿いでうたた寝する

んじゃなかった。

体が冷え切っている このままだと 風邪を引くなそう思いベンチを立った。

一級河川が凍った風をはこんでくる。川幅が大きく町をぬるりと分断しているその上にいくつか橋が架けられている。その橋を支える支柱が橋一個一個違い、好きだった。

特に好きなのが駅前まで続く路面が通るオレンジ色の橋だ、が、もう何年も雨風や日光をうけて渋みのある茶褐色になっている。柱は楕円形でゆるゆると上に行くほど細くなっている水に浸る楕円はなにか頼もしくも感じれる存在感がある それが4本川に突き刺さっているのだ。

4本とも微妙に色合いが違い、見ていてもあきない。別に橋マニアではないが、自分が好ましいと思われる感覚に合致したものだけが好きなのだ。だからこの橋のしたにあるベンチを選んだのだ。

足の上からバサリと落ちた、視線が柱から地面に移り本が途方もなく這いつくばっている。読書家の友人から面白いから是非読めと渡され本だ。

その物をボンヤリみながら土を払った、緑色の爽やかな表紙で、たしかあらすじは水にまつわる話が短編で6章の物語で成り立っているのだそうだ。

はつきりいって 興味はまったくない 本はあまり読まない方だ いや まったく読まない。本に拘束されるのが嫌なのだ、どんなに感動で素晴らしい内容でもどうしても自分の目も脳もそれがすべてを占拠してしまう。

悪く言えばハイジャックだ脳のハイジャック。そこからの解放と同時にくる時間の解放、読み始めてからの時差に精神が合致しない、いやな怒りさえ覚える。

だから、本は読まないし家では絶対読まないと思い、ここに来て読んだのだが、いつのまにやら、寝てしまっていた。すこぶる気分が

よくない、寒いのもだが時間がトリップしたことになるともいえない虚しさがあった。

ふと、賛美歌が終わっていつもの音が戻った時 夢を見ていたことを思い出した。黄色い世界、そして同級生の奥村がでてきたのだ、意外だった。

奥村とは教室も一緒だったが、一言も話をしたことはなかった。

奥村はいつも窓側の一番後ろの隅に座っていた。

いつも何かに耐えるように座っていたようだった。しかし、一回だけ奥村と喋ったことがあった記憶がある。学校の中でも一番長い廊下で奥村が屈んでひたすら鉛筆を拾っている。

奥村は見るところ、友達のいない奴だったな と思い。鉛筆に触れた、拾った深緑の鉛筆を渡してやると びっくりした顔で、鉛筆を受け取った。よほど緊張しているのか顔が綺麗な赤色だった。

すべて拾い終わると、聞き逃しそうな小さな声でありがとうと聞こえた。どういたしましての意味を込めて肩をポンポンと 叩いて、長い廊下のドアを開けた。

それだけだった。それだけだったが、奇妙なほど覚えていた。たぶん何故かと問われると、俺が無意識に憧れているからかもしれない。憧れという言葉が合っているのかどうか分からないが、奥村の孤独がうらやましかった。

では、孤独になればいい。ということではない。集団の中での孤独は耐え難いものだと思う。それは、俺が弱いからそう思うのかも。しれない。奥村はどうだったろうか？あの教室の隅で何を考えていたのだろうか。

周囲の誘いにも頑なに断る奥村は 次第に孤立を深めていった。背中を丸めこの世界から消えようとしているようにも見えたし、もがき苦しんでいるようにも感じた。まだ 消えたくない。しがみついているようにも見えた。

いつも周りに誰かしらいる俺は孤独ではなかったが、孤独になりた

がつていた。ずるいのだと自分でも思う。奥村みたいに貫くことなんて出来やしない。自分がそれをしている奥村に憧れを持つことは必然なのではないだろうか、人は完璧ではないし、どこかしら欠けている。その空いている場所は憧れというピースでカバーするのではないだろうか、それでもしなきゃやってられない。すくなくとも、俺はそうなのだ。

太陽も空から消えてしまい、ほの暗さが這い出てきている。風も先程より冷え切っている。

体がぶるぶると震えてしまう。足早にベンチから離れた。ここから家まで走れば十分でつく、顔に氷の冷気を当てられたみたいに痛い。細い小道の坂を抜け道路にでた。

車のヘッドライトが野生動物のように翔ていく。そういえば、奥村はなにかいつもでは考えられないくらい、激しく怒っていた気がした。暗闇の中の黄色な世界で、何か思ったが、凄まじい冷気を含む風に思考は遮断され、兎に角、はやく あの手も心もほぐす温かい湯に入りたい。とそう切に思った。

家につくと、すでに風呂は湧いていた。まだ、早い時間だから父も妹も帰ってきてない。一番風呂だといそいそと風呂に向かった。今や我が家いちの最新のものだ。半年前ほどにやっとこさ自動の湯沸かし器がついた。それまでは風呂の真ん中にある四角いおもちやみたいな手動のものでガスを点火させ、水をお湯にかえていた。そのものは小さな青いハンドルを真ん中として上に長方形の窓があり、二つの丸が並んでいた四角いものだった。ハンドルを右に傾けると、ガスがごおーと出てくる音が聞こえる、二つの丸が黒から朱色になると、すばやく右から左へと移動するとボツと火がつくものであった。今してみると大変難儀なものだとおもった。最終的にはハンドルが割れてしまい、むき出しとなった鉄のハンドルをスパナで挟ん

でしていた。粘りに粘っていたが、とうとうハンドルを動かしてもガスを吐き出さなくなってしまったのだ。次の日にはすぐに業者の人たちが風呂に新たな命を授けてさつていった。

それからバラ色だった。いつもなら掃除に5分 水張りに40分 沸かすのに 30分 かかっていたのが、いまでは20分で沸くのだ。見ていた家族は嬉し顔だった。

そう懐かしい記憶を見ながら、風呂に入った。湯気で最初は気づかなかったが、湯船は黄色に輝いていた。めったに入浴剤をいれないのに、何かの試供品か誰かにもらったのだろうと推測した。凍えた体に湯が染み込む痛さと筋肉が弛緩していくのがわかる。徐々に湯と体が同等の温かさに変化しているのがわかった。

息を一息吹き出す、寒さで緊張していた体がほどけた。甘い何か懐かしい匂いがする。この色からして、レモンか柚、柑橘系の匂いだと思っていたのだが、それとは反する甘い匂い。これは何の匂いだろう。そう思いながら湯船に頭を沈没さしていった。

泳ぐのは苦手だったが、風呂場は好きだった。昔はゴーグルをして風呂に入ったもんだ。背中を湯底につけて上を見上げると、いつもの空間が不思議なぐにやりとした光景に姿を変えるのだ。ゆらゆら水がうねるほど世界は変わっていくのを自分がゼリーに入っている果物のように感じた。違う物質を通して外の世界がみえることがたまらなく興奮した。じぶんは黄色いゼリーの中にいるミカンのような存在だ。すぐく落ち着く、母親の胎内の中の様な安心だ。力を徐々に抜いていく。

湯底はどこだ？俺はどこまで落ちて行く？奥村のあの顔、あれは俺を見ていたのに違いない。口が激しく動いている、何にその感情を高ぶらせているのだ？奥村のその顔を見ながら 意識を離れた。

間違いなく田辺君だ。

黄色い風呂に浸かっている。

さきほどの声も田辺君だったのだろうか？わからない。彼と話したことがないからどんな声か想像ができない。ただ、教室の真ん中から聞こえるあの笑い声は田辺君のものだとわかっている。

さきほどまでの感情が一気に元の状態にまで落ちた、理科の実験でよく使うガラスの温度計。許容温度を突破して、ガラスを貫いてあの赤い液体が外に飛び出たのだろう。

温度はどんどん下がっていく。冷えていく僕はどうしたものだろうと考えた。その中で僕はさっきの自分を思い出した。瞬時に奥の痛みに顔をしかめた。なんてことをしたのだろう。

僕は嫌悪感と吐き気が体の奥底からどばどばと体を舐めるように這い上がってくるのを感じた。あの中にいた子はどうなったんだろう、僕はなんてことをしたんだろう。僕自身の欲望のために死なせてしまった。

僕は人を殺したのだ。体の底がガタガタと震える。何かが僕の体を舐めている、内側から。僕はその不快な感触に身震いした。手を見みると、手は異物を含んだ奇妙な色をしていた。緑のようで暗い、黄色のようで明るい、鉄が錆びた色にも見える。僕はぞっとしながら手をふいたが、色はとれない。上に上にと這ってくる。染み込むようにじつとりと。足をみれば足はこの世界の色と同化し始めている。

取り込まれる。そう 焦った。しかし、僕にはもうどうすることも出来ない、拒絶することも。諦めに似た感情が体に宿った。視線を上に移動すると 田辺君がこちらを見ている。彼の表情は無表情だ

が、そこには暖かみのある不思議な顔だった。何故彼はここにいるのだろう。彼の役目はもうないのではないだろうか？

「なんでそんなとこにいのの？」突然田辺君が喋った。

僕はびっくりとした、やはりさっきの声は田辺君のものだと確信した。

では、あれを田辺君が見ていたことになる。僕は奥につまるような苦しい痛みを感じた。泣きだしたい、ここから逃げたい。

僕は頭皮が痛くなるほど、頭を引つ掻き回した。嫌だ。嫌だ。嫌だ！これ以上、こんな醜い僕を見てほしくはない！自分の一番奥の欲望を他人に見られた、激しく心臓が脈を打っている。早く、早くもつと奥底に行かないと、僕は壊れてしまう。両手で顔を覆った。身体が、震えた。

「奥村、そんなに奥にいくなよ、そっちにはそんなにいいもんがあるのか？」ぱしやりとお湯を滑らせ、こちらに腰をまわして縁に両肘をついて笑っている。

そっち？と僕は顔から手を離し、後ろを振り向いた。深い何でも飲み込む闇が渦をまいて続いている。僕がこれから行くところ。僕はぼんやりとそこを見ていた、同化はすでに腰の辺りまで浸食している。体がひどく重い鉛を埋め込まれたようだ。心もそれと同じくらい食い込むような重さだった。僕は闇をじっと見ながらこういつた。

「田辺君、田辺君は何故ここにいの？」声は低い渋みと掠れを伴っていた。

「奥村、ここにはお前が望んでいるもんなんかありやしないぞ、ここは無情だ。すべてその意識のなか処理されちまう。大切な感情も感覚も思い出も、その暗闇が浄化するんじゃない。ただの闇にしてしまっんだ。ここは一種のどかい濾過装置だ。吸収しやすいように作りかえられてしまっんだよ。お前それでもいいのか？」田辺君は少し怒ったような声だった。

ああ、だからか。ここは一番最後の過程だったんだ、僕の欲望を

濾過する。あんな醜い僕になったんだ。でも、あれは本当に一番奥底にある確かな僕自身だった。僕は闇から目を離し、田辺君を見た。お湯が黄色から透き通る緑に変化していた。

「だけど、僕にはもうここにしか居場所はない！元の世界に僕が居れる所なんかない。僕はもう諦めたんだよ…田辺君、田辺君なら分かっているでしょう？」僕は涙が出ないように懸命に耐えた。

田辺君は一瞬、とても痛そうな顔になったが、すぐに鋭い目つきで僕を見た。

「奥村、自分から逃げてはだめだ。それでは前に進めない、自分を自分として認めて受け入れろ！そんなに、自分を否定するなよ奥村…。」

そうだ、僕は自分を否定し続けていた。内向的な自分、孤独な自分、妬む自分、こんな僕になんてなりたくなかった！僕は…！僕は…！僕が必要ない僕になりたかった。

このままでいいのか？このまま分解されてもいいのだろうか？嫌だ！もう1度、僕は僕になりたい！

「奥村、こんな世界は偽りだ。自己満足でしかない 空虚な物語だ。目を覚ませ、奥村っ！その手を伸ばせっ！体に意識を宿せっ！」その貫くような声が響き終わる前に僕は駆け出した。すでに同化は胸にまで達していた。動く度に、鋭い痛みが全身を貫く。痛くて、痛くて。涙が汗のように流れ落ちる。残った肩を振り回しながら闇を掻き分けていく。もう体力も気力も限界だった、僕は声を上げながら目をつむり突っ込んだ。闇が僕を飲み込む 一瞬先に僕は緑の世界に入った。耳の奥に闇のけたたましい声が聞こえた。

浮かんでいるような、落ちているような不思議な感覚だ。

風呂に入っていたはずの俺は違う所に立っていた。

それは先ほどまでいた川沿いの陸橋の下だった。しかし俺がいた陸橋ではなく、もう一つ向こうの川上の陸橋だった。ここの柱もお気に入りの一つだ。

X型の鉄鋼が幾重にも重なって、綺麗な水色のペンキが施されている。水に浮かぶその情景はなんとも芸術的であった。こちらの橋は幾分か新しげであった。ゴトンゴトンと路面が走っている。たしかこちらの路面は図書館にいけるはずだ。そうおもいながら柱のそばに近寄った瞬間、そこに誰かがいることに気づいた。

もう夕方にさしかかり暗闇にいた人にまったく気づかなかった。いや、それだけではないことを悟った。その人に、存在感が無い、まるでこの世のものではない雰囲気。まさか、と思い。さらに近づいてみた。距離を縮めるほどに、俺はこいつを知っている。その人は奥村だった。急いで、奥村に手を伸ばすが、ほんの一瞬早く、奥村は川に飛び込んだ。

俺は慌てて後を追った。

バシャンと派手な音を立てて、奥村は凄まじいスピードで深い闇へと沈んでいく。俺との距離はずんずん開いていく。何故、奥村がこんなことをっ！そう激しく思った。

「お前のせいだ、お前のせいだ わかっているんだろ。知っているんだろ。惚けたふりしちゃってさ。」前方にイスに座る男がいた。

口にはタバコをくわえて、プカプカと煙を楽しそうに吐き出している。俺はひどく戸惑った。なんなんだここは？薄暗い部屋の真ん中に男が一人鮮やかな青いスーツとそれとに似合う青いパナマ帽を被った男が椅子に腰を深く下ろしている。部屋には家具は愚か窓もドアもない。密室の空間だった。壁は薄茶色で少し黄ばんでいる。

天井には裸電球がぶらりとぶら下がっている。床は板張りで古い匂いが漂っている。キヨロキヨロと見回していると、いきなり男が喋りだした。

「おまえさ、奥村がおかしいって気づいていただろう？気づいていてほつといたんだろ？」男の声は湿度が高くぬめりとした不快なものだった。

そんな不快を吹き飛ばすほど、俺の心臓がどくと嫌な音をたてた。なんで、何故こいつは奥村を知っているんだ？やつは帽子の影の中にニヤリと笑いながら嫌みのように足をあげている。

気づいていた。奥村がおかしくなったのを、気づいたのは廊下で奥村に合った数日後だった。いつも通り教室に入り、真ん中の席辺りにいる二、三人の友達と喋りに入った。

ふと奥村を見てみるとやはりいつもの場所に座っていた。窓側は今時寒くてみんな座りたがらない。それでも奥村は座っていた。そんなことをぼんやり考えていたら、いきなり奥村と目があつた。焦って目をそらすそうと思ったが、それは出来なかった。奥村と目があつたのは俺だけだった。奥村の目は俺を見ているが、見ていない。あらゆる光を受け入れず、静かな闇へと沈んでいるような深い瞳だった。

奥村の目には何も写っていない、この教室もこの世界も。その瞳は暗い世界への入り口が覗いていた。見てはいけない。

俺の中で警告音がなり響いた。しかし、目がそらすことができない。「田辺っ！聞いてんのかよー」という不満の声が響いた。ハッとして目の前にいる友達に視線を移した。

ああ、悪かった。と苦笑いで答え、友達がまた喋り出した。

俺はあの目から逃れられ安堵したが、話は耳に全然入らなかった。あれは死に向かうような目だ。翌日から俺は奥村を見ようとはしなかった。

あの目を見るのが怖かったし、そんな目をした奥村を見たくない。自分まで蝕まれると感じた。

おそらく俺いがいの奴は気づいていなかっただろう。それなのに俺は奥村を見放したんだ。フンっと鼻で笑う音がした。

「ほれみる、何が懂れたよ。馬鹿みたい、チンケな冗談。お前さ奥村が嫌いだったんだろ？孤独を持っていながらあんなに不満そうにぐじぐじとしていて、そうじゃなきゃ奥村なんかいつも目の隅にいないだろ。」

一人になりたい、人との関係を煩わしく思っているのにスッパリ切ることが出来ない、よわあいゝよわあいゝ自分の憎しみを奥村に向けたんだろう。」ケタケタと肩を震わし、不快な笑いを始めた。

すべてその通りなのだろうか？世界が狭まる感覚と視界が広がるその狭間で俺は考えた。そうかもしれない。俺は奥村にすべてを背負わせたのだ。奥村を見るたびに、臭うあのものは心の内から憎しみが染み出していったんだろう。その臭いは、鼻を覆いたくなるような臭いだったろう、だが、その臭いさえも甘美さを含む刺激的な臭いに変わってしまったのだ。

それでも、今の俺はもう奥村を見放す訳にはいかない。力を込めて心を奮い立たせた。そんな俺を見た男は笑いをピタリと止めて、つまらないのこいつと、気だるげに立ち首をこきこきとならした。男はこちらをニヤリと笑いこいた。

「けど、一ついっておくよ、奥村の最後を押したのは君なんだよ。田辺くん。僕と同姓同名、君自身のボクだよ。」そういって、男はパナマ帽をひらりと右手でつまみ紳士気取りに左手を後ろにまわし帽子を振り下げた。

そこには、紛れもなく俺が立っていた。言葉もなく固まっている俺に、男はこういった。

「ここは一瞬の大きな濾過装置だよ、人間を濾過するためのね。早くしないと、手遅れになるぞ。」帽子で肩を叩きながら男はそういった。

その声には先ほどまでの不快な含みは消えている。

「よく、受け止めたな。」そう言い終わる前に指をパチン鳴らした

瞬時、空間が弾かれるように波をうつた。

とたんに、立っていた、床板が巨大な掃除機で吸われたように、ボカリと開いた。重量に逆らえず俺は足元の暗闇にと落ちていった。ほんのわずがだが、男の顔が見えた、微笑んでいた。

黄色い世界に浸る間際だった。

本当に良いことなんて分からない。僕がどうしてこの世界に生まれたのか、偶然だったのだろうか。僕はその偶然を心底憎んでいる。どうしてこの世界にいるの？そう問われれば、僕は何と答えるだろう。きっと答えることは出来ないだろう。うつむきながら僕はこの世界に座っているだけ、立つ気力もない動くことさえ出来ない。そうさせるのは、僕の甘さからだ、自分が大事で大事で辛いことなんてしたくない、面倒くさいことも。悲しいことも苦しいことも逃げて逃げて、逃げ続けた。

見てはならない、見たくない、こんな現実もこんな僕も、見るのは嫌だ。

助けて。誰か僕を救ってくれ。お願い。そうしなければ僕はもう、駄目になってしまう。

ぼくに答えを教えて。

なまぬるい感覚に僕は目を覚ました。

くすんだ柔らかい若草色の世界に僕はふわりと浮かんでいた。ここまでも続いているような広い世界だと僕は感じた。

ここは、柔らかい暖かさが広がっている、拒絶でもなく、受容でもない。ただ、僕が存在していることを認めている。ここにいることを認め与えてくれている。

僕は目を閉じた。さきほどの場所とは全く違う、あそこはもっと冷たく吸い込まれるような圧迫感がその世界を占めていた、すべての熱を奪いさるような孤独の冷たさだった。

僕はたまらず身体を抱いた。ふと、手を見てみれば、闇に飲み込まれていた手は、元通りの柔らかい肌色にもどっていた、白い肌の中をマグマが絶えず爆発する音が聞こえる。

すべての闇は溶けたんだ。手をぎゅっと握りしめ、唇を噛んだ。生きてる、僕は生きてる。堪えきれず、涙がこぼれ落ちた。

田辺君を見たとき僕はいつもの自分に戻る事が出来た。

腕をグイと後ろに小さく引つ張られ、振り返ると僕がこちらを見ていた。その目は悲しみに染まっていた。それはとても切ない感情で、僕の居るべき場所は、ここ、僕こそがキミの場所なんだと言わんばかりに僕は僕を取り込んだ。

懐かしい胸の痛みが体を縛った。あの目は、拒絶されていることに諦めを見出した孤独な瞳だった。僕はどれだけ僕を苦しめてきたんだろう。涙はいつそう激しく流れ落ちた。

それはアクアマリンのような透き通った青色だった、涙の粒はこの世界と触れ合い滲んでいく、とめどなく落ちてくる粒は小さな灯火を内包してこの世界に訴えた。

生きよう、僕は生きることが望む。

僕は、僕であることを認めて受け入れる。僕は、僕と一緒に生きて行く。

いつも、僕は僕を排除したかった。いらないと思った。

自分に背を向けて、見ない振りをした、いないものだと思った。けれど、僕自身を否定することで、僕の理想と僕の現実がお互いを受け入れず反発し合い、内部で膨れ上がりめりめりと僕自身を引き裂いてしまった。

受け止める勇気がなかった。認めたくなかった。

多分、一番最後の闇の世界にあつた黄緑色の物体に入っていたのは、僕だろう。僕が、僕自身を殺していたんだ。今まで何度も、何度もそれを揶揄していたのだと気づいた。

いつも自分から目を反らしてきた。でも、見なければならい。どんなに目を反らした所で僕自身は決して別な誰かになることは出来ない。

嫌になるかもしれない、死にたいと思うかもしれない。それでも、今この胸に灯った火を僕は守ろうと思う。

覚悟と同時に目を開けた。若草色だった世界は、透き通った、青の世界に変化していた。清冽な感覚が身体を貫いた。身体はしつかりと立っていた。ずっと浮いていた僕は、自分を支えるという動作に四苦八苦した。

背筋を伸ばしながら身体の均等を保ち、一步を踏み出した。

汗が流れ落ちる、辛い。まったく使っていなかった筋肉が痛みを訴えている。体が震える。よろめきながら僕は、笑った。辛いのに、痛いのに、笑顔がこぼれてしまう。

「奥村、何笑ってんだよ。」

少し離れた所に、田辺君が腕を組みながら、立っていた。柔らかな笑顔だった。

「なんだか、とても楽しくて。つい……」

僕は照れながらそう答えた。

『そうだろ、世界は楽しいもんなんだよ！お前はもつと楽しむべきだよ。…奥村、俺はさ本当の事はわからないけど、改めて自分を見れた気がする。……ごめんな。』

その後の言葉はでなかった。いや、言えなかった。直接伝えるのは良くないと直感的にそう思った。奥村は理解できてない顔だったが、少し悲しそうに、それでも目に光が灯っていた。

「僕もそうだよ。ここに来てよかったのかもしれない…。…本当の事はわからないね。きつと誰にもわからない。」少しうつむきながら、首をゆるやかにふった。

僕はまた涙を流した。思い出したのだ、僕が僕にしてきた事を、体がドスリと重くなったが、それでも、歩みを止めなかった。ここで止まるべきではないと思った。

それを、受け止めなければ僕は前に進めない。それを実行に移さなくては意味がない。そう、心に言い聞かせた瞬間、閃光が走った。

胸から、二羽の黒い大きなカラスが翼を広げて飛び出した。とたんに、二羽のカラスは融合し真っ白な羽へと色が変わった。純白の衣を纏いながら、羽を散らしながら羽ばたき青い世界を貫いて行った。

いつの間にか握っていた白い羽を持ちながら、呆然とその様子を見ていたが、気づくと、さきほどまで重かった体が嘘のように軽くなっていた。胸を撫でながら、去って行った方向を見上げた。あれは、もしかして…と思ったとき。

「あんな綺麗な鳥はじめてみた。…奥村すげーな。」

まだ、見上げたままの彼はそうつぶやいた。何だかその姿が、幼く見えて思わず笑ってしまった。それに気づいた彼は、誤摩化すように、

「お前のせいで、エライ目にあっただぜ。なんか奢れよ！」

と、プンスか怒ったまねをした。彼がここでどんな目に遭ったのかは分からないが、きつと大変だっただろうと思い。僕は、汗だくになりながら追いついた彼の顔を見て、

「うん、わかったよ、田辺。」

彼はニヤリと笑って、そうこなくっちゃな〜とボソリと言いながら、僕の肩をポンポンと叩いた。帰ろう。二人は頷いた。

僕は握りしめていたものがそうするための物だと確信を持って、白い羽を青い世界に突き刺した。青い空間は風船のように弾けながら、細かい青い結晶となつて、一瞬にして辺りに散っていく。

世界が静かに去って行くのを見つめながら、手をしっかり握り合つて僕たちは浮き上がった。

一月の川は心から凍てつくほど冷たく流れている、浮上する緊張感を胸に秘めて僕はこう思った。

どんなに助けを求めても、自分が変わろうと思わなければ意味がない。けど、その勇気を与えてくれるのならきっと、僕はこれからも生きて行くことが出来る。

振り返らずに前を向いて僕は言った。

「ありがとう。僕は、もう、一度生きてみるよ。」

最後の涙を流して僕たちは、光に包まれた世界に帰った。

ああ、5時半の賛美歌が聴こえてくる。

END

（後書き）

初めて完結出来た小説です。拙い文章ではありますが、よろしく願
いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0229s/>

よどみと流れ

2011年10月8日22時06分発行